



高松松平家 ご城下めぐり

(公社) 香川県観光協会

〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1-10
TEL:087-832-3377 FAX:087-861-4151

うどん県旅ネット

検索



瀬戸の都の十二万石 高松松平家ものがたり



香川県の県都「高松市」。このまちには、今も高松の殿さまとして慕われているかつての大名家がある。高松藩松平家。水戸徳川家と深い縁に結ばれ、十二万石の殿さまとして、十一代・二百二十八年間、江戸時代の高松を治めていた。

この間、居城である高松城をはじめ、別荘である栗林荘(後の栗林公園)、武家屋敷やご城下の町並みが整えられ、香川漆器などの伝統工芸、庵治石などの地場産業も大いに育った。松平家がこの地にもたらした恵みは計り知れない。

葵の御紋

江戸時代、徳川御三家の分家は「御連枝」と呼ばれ、本家の跡継ぎに支障が生じた場合は、この家から世継ぎを出すことになっていた。そのため高い地位が与えられていたが、なかでも高松松平家は、御三家連枝の中で唯一、將軍家の家紋「丸に三葉葵」を表紋として使うことが許されていた。いわば將軍ブランドの使用が許可された別格の御連枝である。

それもそのはず、高松松平家の初代藩主・松平頼重は、「この紋所が目に入らぬか…」でおなじみの水戸光圀の実兄にあたる。

名君頼重の治水事業

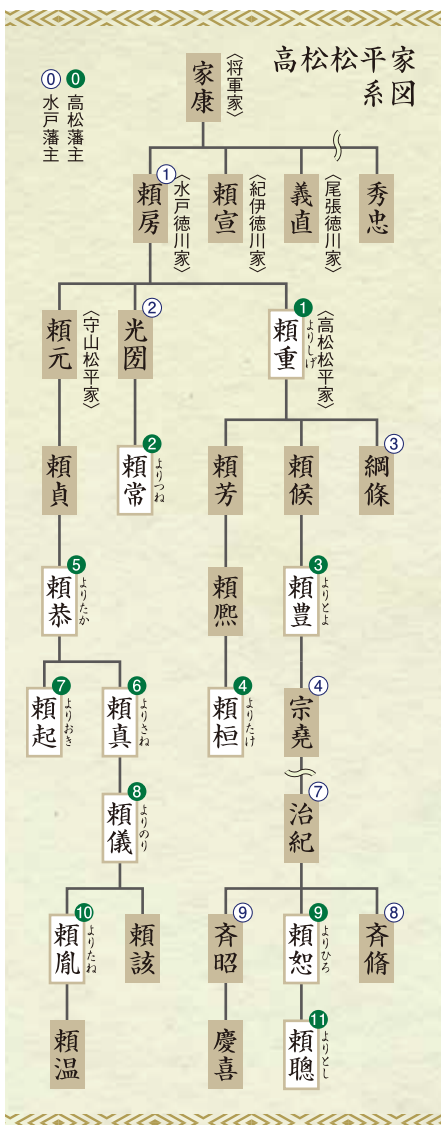
その頼重が高松に入ったのは寛永十九年(一六四二年)、常陸下館(茨城県)五万石から東讃岐十二万石への大栄転であった。

歴代藩主のなかでも名君といわれる頼重。夢に燃える若き領主は、領民の心を掴むべく奔走し、まずは治水に力を注いだ。瀬戸内海に面する讃岐は、穏やかな気候に恵まれ、海に山に美しい風景が広がる。殿さまも海辺の城を愛し、

頼重と光圀

その後も高松松平家は徳川幕府に近い家柄として一目置かれ、豊かな繁栄を高松にもたらすことになる。そこには、頼重出生のドラマがあった。頼重と光圀は共に徳川家康の十一男頼房と侍女お久の間に生まれた男子である。お久は正室になることはかなわず、諸処の事情により、二人の誕生は秘密にされた。兄の頼重は京都に預けられ、後に弟である光圀の方が先に親子の名乗りを上げ水戸藩の世継ぎにと定められてしまう。

中国の古典『史記』の「伯夷伝」を読んだ光圀は、その中に描かれた兄弟の世継ぎをめぐる話に影響を受けたのか、兄が水戸藩を継ぐべきであったと思う悩む。そこで、自らは子をもうけず兄の子を水戸藩主にと考えていた光圀だった



飛龍丸物語 香川県指定有形文化財
公益財団法人 松平公益会所蔵(香川県立ミュージアム保管)

ときには庵治や塩江に足を伸ばし、別荘暮らしも楽しんだ。
けれども、雨が少ない讃岐は水不足に悩まされていた。そこで、領地に四百六のため池を築き、既存のものを含めるとその数千三百七十二にも上ったという。また、入封して間もない正保元年(一六四四年)、高松城下に配水管や配水枘を埋設し、上水道を整備したと伝わる。
京都から招いた名工たちにより陶業や織物業を起し、茶の湯にも造詣が深かった。さらに、法然寺を再興し、金毘羅大権現を幕府の天領としたのも頼重である。

が、後に侍女との間に生まれたわが子がひそかに高松藩で育てられていることを知る。それでも、水戸藩の跡継ぎには兄の子をという当初の思いを貫き、水戸藩は頼重の子である綱條が継ぐことになり、光圀の子である頼常は高松藩の二代藩主となるのである。

ちなみに、水戸藩と高松藩の養子縁組は幕末まで続き、徳川最後の將軍・徳川慶喜は、松平頼重の子孫にあたる。

民を思う頼常

延宝元年(一六七三年)、頼常は二十二歳で松平家を継ぐ。苦しい藩財政のもと、質素倹約を励行し、飢饉に苦しむ領民の救済にあたる。また中野村(高松市中野町)の天満宮の南隣に講堂を建て、藩士や庶民の中でも優秀な者に勉学をさせた。頼常自身も学問に優れ、將軍綱

吉の前で儒学の講義をしたことがあり、將軍自筆の「進徳」の二文字を賜っている。

心優しい頼常が領主となった年は、いつにない豊作に恵まれた。そこで、領民は定められた租税に加えてさらなる米を納めたという。それを聞いた頼常は「私は不徳で、民の利益になるような事をなし得ないのに、民が十の十一（租税の他に十分の一）を納めて祝ってくれるというが、恐らくは下々の民の意思ではないであろう」と役人に実情を視察させた。そして、「われわれはどうして其の利を私の物にしてよからうぞ」と凶年のための蓄えにしたと伝わる。

また、頼常が暮らしに困窮していた農民のために、失業対策事業として栗林荘の整備を行った話は有名である。

名園を愛した頼豊

よりとよ

頼重の孫にあたる三代藩主頼豊は、華やかなことを好み、御林御殿と呼ばれた栗林荘で大半を過ごしたという。現在の名園・栗林公園の整備に尽力した一人であり、園の花ともいえる掬月亭につながる「大茶屋」は、頼常からこの頼豊の時代にかけて誕生したと推測される。

領主時代には次々と天変地異に見舞われ、宝永七年（一七二〇年）の水害の際には、各戸へ二分金を授けたという。また、江戸では富士山が噴火するなどの被害が出た宝永大地震では、讃岐においては五剣山の一峰が折れ、詰田川の東大路では二メートルもの裂け目ができ、家屋の

を治め、藩校「講道館」を創設した。

その弟にあたる七代頼起の時代は、先代たちの功績により、藩の財政は安定していた。そこで、飢饉の対応に悩む幕府に献納金を申し出るほどであったという。頼起の時代に向山周慶が砂糖の製造に成功する。

八代頼儀の治世には、製塩と製糖の産業が大いに育ったが、「享和新法（※１）」という財政政策が失敗し、御用商人からの借金がかさむ。

頼重の血筋にあたる九代頼恕は、その財政困窮を救うため、「天保の改革」と呼ばれる政策を展開し、久米栄左衛門の建白書（※２）を採用する。それにより、砂糖と塩の利益が上がり、晩年には藩の財政が立ち直った。



高松城跡（民権）

※１ 享和新法

藩の増収をねらって藩札を積極的に出付。その結果はインフレによる物価の上昇で領民の生活は苦しくなった。

※２ 久米栄左衛門の建白書

砂糖と塩の生産・流通に関わる財政再建策。これにより、坂出塩田が大規模に造成された。



栗林公園（飛来峰からの眺望）

倒壊、犠牲者も出た。頼豊は、被災した家中や郡内の人々に救済のための米や金をふるまったという。

甘辛い藩財政

よりとよ

四代頼桓は、頼常の政治にならい倏約を行ったが、病氣のため二十歳で逝く。その後を継いだ五代頼恭も財政の立て直しに奔走し、家臣に砂糖製造を研究させ、塩田の開発に力を入れた。また、頼恭の命により、水の生物を描いた「衆鱗図」など四種十三帖の博物図譜が制作され、写真のような緻密な描写は美術的にも高い評価を受けている。

六代頼真は、父の政策を受け継ぎ手堅く藩

頼聰帰京阻止事件

よりとし

十代頼胤の時代は、日本に開国を迫る外国の干渉が強くなった。そこで、沿岸防備のために多くの費用が必要であったが、先代の殖産事業から得る利益が大きく、藩財政は揺るぎなかったという。

そして、高松松平家最後の殿さまである十一代頼聰の時代となる。ときは幕末、徳川最後の將軍慶喜は血縁上の従兄弟、佐幕派として官軍と戦うことになる。最後は高松城を無血開城し、頼聰も一時は罪に問われるが、二人の家老の犠牲もあつて許され、藩籍奉還で知事に任命される。

ところが、廃藩置県により頼聰は東京移住を命じられた。すると、藩内の民衆は動揺し城下に押し寄せ、引き留めるための嘆願や実力行動に出て、その数は一万人を超えたという。当時の人々にとって、松平の殿さまこそが讃岐の指導者であったのだ。

永遠のお殿さま

その後、頼聰は伯爵となり、その子頼壽は貴族院議長も務めた。その頼壽によって、大正十四年に「松平公益会」が設立され、香川県の人材育成や教育の普及、文化の発展に多大な貢献を続けている。高松城の城跡の一部も、松平公益会に継承され、さらには高松市が譲り受け玉藻公園となる。観光事業においても、松平家の恩恵は大きい。

高松藩略年表



一六四二	寛永十九	松平頼重が高松藩十二万石を拝領して高松城主となる。
一六四四	正保一	城下に上水道を敷設。
一六六九	寛文九	高松城天守閣上棟式が行われる。
一六七〇	十	仏生山法然寺落慶法要。
一六七三	延宝一	頼重隠居。出家して源英と号する。頼常二代藩主となる。
一六九五	元禄八	高松藩祖頼重逝去。
一七〇二	十五	頼常が困窮人救済のため栗林荘の庭普請を行う。
一七〇四	宝永一	中野村に藩校・講堂を建てる。
一七一八	享保三	頼豊三代藩主となる。
一七三二	十七	城下で江戸時代最大の火災が起こる。享保の大飢饉。
一七三五	二十	頼桓四代藩主となる。
一七三九	元文四	頼恭五代藩主となる。
一七四五	延享二	栗林荘が完成。「栗林荘記」が執筆される。
一七五五	宝暦五	屋島潟元に塩田を開く。
一七五七	七	藩札を発行する。
一七五八	八	藩財政の再建に乗り出す。
一七七一	明和八	頼真六代藩主となる。
一七八〇	安永九	藩校を拡張し、「講道館」と名付ける。頼起七代藩主となる。
一七八九	寛政一	向山周慶が白砂糖の生産に成功する。
一七九二	四	頼儀八代藩主となる。
一八〇一	享和一	享和新法が始まる。
一八〇八	文化五	伊能忠敬が高松藩の海岸線を測量する。
一八一九	文政二	領内各地に砂糖会所を設置する。
一八二一	四	頼恕九代藩主となる。
一八二九	十二	久米栄左衛門、坂出塩田を完成させる。
一八三三	天保四	新藩札（天保札）を発行する。
一八四二	十三	頼胤十代藩主となる。
一八六一	文久一	頼聰十一代藩主となる。
一八六四	元治一	頼聰が第一次長州征伐に出立。
一八六七	慶応三	大政奉還。ええじゃないか流行。
一八六八	明治一	鳥羽・伏見で薩摩と交戦。高松藩朝敵となる。
一八七一	四	高松藩が廃されて高松県が設置。頼聰の帰京阻止の民衆騒動起こる。

殿さまはこぼれ話

頼重の讃岐漫遊記

二十一歳で藩主となった松平頼重は、裸になってお堀に飛び込み遊泳したというエピソードが伝わる。ときには、船遊びや魚釣り、狩猟などを楽しんだという。その行く先は、沖に浮かぶ女木島・男木島、庵治の大島・兜島、志度の小田浦、西は塩飽の島々まで足を伸ばし、東は引田沖でアシカをしとめたという記録まで残っている。香東川の上流では鮎を捕まえ、栗林荘の裏では鴨を、石清尾山、五色台、白鳥の与治山では鹿やイノシシを追いかけ回した。殿さまをまねて海に山に讃岐漫遊を楽しんでみては。



陶製松平頼重像
公益財団法人 松平公益会蔵
(写真提供:香川県立ミュージアム)

波寄せる水城

松平家の居城「高松城」

高松松平家の殿さまが住んでいたのは「高松城」。別名「玉藻城」と呼ばれる水城である。柿本人麻呂の歌にちなんで玉藻浦とも呼ばれる海辺に築かれた石垣。そこには、ひたひたと瀬戸の波が打ち寄せ、月見櫓や天守閣からは、行き交う船の姿を眺めることができた。

城の誕生

豊臣秀吉より讃岐一国を与えられた生駒親正が、「篋原（野原）」と呼ばれていた浦に城を建て始めたのは、天正十六年（一五八八年）のことである。当時、讃岐の各地にも山城があったが、それらは全て乱世の城であり、これから讃岐を治めるには良港を持つこの地に城を建てるのがふさわしいと考えた。一説には、黒田如水もこの地を国主の居城にふさわしいと称賛したという。そこで、海水を引き入れた堀を巡らし、城造りを行った。そして、源平合戦で知られていた山田郡高松郷の地名を取り、「高松城」と名付ける。もとの高松は古高松とした。

しかし、生駒藩は四代高俊でお家騒動によりお国替えとなり、松平頼重が新たな主として城に入る。

ない。「桜御門」を通して、その北の三ノ丸や二ノ丸に入る。

ひうんかく

披雲閣と天守閣

三ノ丸に設けられた御殿「披雲閣」。ここが松平の殿さまが寝起きする大名暮らしの舞台であり、また、藩士たちが働く役所のような場所でもあった。現存する披雲閣は大正時代に建てられたものであり、藩政時代は今の建物の約二倍もの広さがあったとされる。

披雲閣から「鞘橋」を渡ると本丸がある。

本丸の天守閣は、三重四階、地下一階。最上階が下の階より張り出した南蛮造り。水面から約十三メートルの石垣の上に約二十六・六メートルの堂々たる姿。今は幻となった四国最大規模の

高松城の本格的な改修は、寛文から延宝期（一六六一～一六八一年）といわれている。初代藩主の頼重から二代藩主頼常の時代にわたり、天守や東ノ丸、北ノ丸を新造。さらに、月見櫓、良櫓を建て、三ノ丸に御殿を建造、松平家時代の高松城が完成する。周囲には武家屋敷、職人のまち、商人のまちを置き、いつしかにぎやかな瀬戸の都となった。

いざ入城

そんな歴史を踏まえ、江戸の昔をしのんで玉藻のお城に入城してみよう。

まずは「大下馬」と呼ばれる一画で馬を下りる。同じ場所に現在も、車を降りる駐車場がある。最初に渡る橋は筋交橋。城内から敵の側面めがけて矢を射かけるため、斜めに架けられている。

東御門と呼ばれる旭門をくぐれば、立ちどかるのは大きな石の壁、ここで敵を封じ込め、集中砲火を浴びせかける。北側には埋門、前に進む敵を背後から攻撃する。

その先に広がる「桜ノ馬場」では、ときには殿さまが乗馬の稽古をしていたかもしれない。

天守の上からは、瀬戸の絶景を見渡すことができたろう。

波に浮かぶ城影

殿さまには参勤交代という勤めがある。高松松平の殿さまは、北ノ丸にある水手御門から堀に浮かべた船に乗り込み、沖の御座船「飛龍丸」に移り、まずは海路で江戸に向かった。家来や側室たちは、月見櫓（元は「着見櫓」と表した）から涙で曇る船影を見送ったかもしれない。到着の頃は、今か今かと沖の御座船を探したに違いない。

沖行く船からは、海の上に浮かぶように城が見えたという。「讃州讃岐は高松さまの城が見えます波の上」。



披雲閣

現在の「披雲閣」は大正時代に12代頼壽伯爵によって建てられた同名の屋敷。江戸時代をしのぶ本格的な書院造りに洋風の要素も加わり、文化遺産として価値の高い御殿である。（重要文化財）



鞘橋

唯一本丸に続く「鞘橋」。架けられた当時は敵を射殺するために屋根が無く、平和になった江戸の中頃に屋根が造られたと考えられる。



天守閣跡

明治時代に天守閣を失った石垣。解体修理が行われ、柱の礎石などが見られるようになっている。

現在南東の隅にある「良櫓」は、東ノ丸の北東隅にあったものを移築したもの。かつて、ここには太鼓櫓があった。（重要文化財）



良櫓

当時は海を埋め立てて造ったという北ノ丸。今は、さらに北側も埋め立てられ、波打ち際から遠ざかってしまった。それでも、高松港を背景に「月見櫓」・「水手御門」・「渡櫓」が並ぶ。（重要文化財）



月見櫓・水手御門・渡櫓

景観を
こぼれ話

殿さまと学問

今という役所の仕事は城内で行っていたが、藩士の教育機関である藩校は城外にあった。二代藩主頼常は、元禄十五年（一七〇二年）儒学を学ぶ講堂を中野天満宮（高松市中野町）の南側に建設。この講堂は一時下火になったが、四代頼恒が再興し、家臣はもちろん農民や町民も集まり、庭中に立つて講義に耳を傾けたという。さらに、六代頼貞は安永九年（一七八〇年）、天満宮の北にこれまでの藩校より規模の大きな学館「講道館」を建設し、文武両学を奨励した。

平成のお城で話題 二つの「たいがんじょうじゅ」

城の堀に鯛が泳ぐのは貴重でめでたいこと、そこで「鯛願城就（たいがんじょうじゅ）」と名付けられ、鯛のエサやり体験ができる。季節限定で連航される和船（有料）に乗れば、船の上からも鯛のエサやり体験ができるとか。園内の大岩の間から成長する幼松。こちらは「大岩成樹（たいがんじょうじゅ）」。



高松城跡・玉藻公園

高松市玉藻町2-1 ☎087-851-1521
【入園料】大人200円、小人（6歳以上16歳未満）100円
【開園時間】日の出～日没（月によって異なる）



棋形

「旭橋」の前にある「旭門」。現在はここが入園料を支払う入口（ことでん高松築港駅の北には西門がある）。その前には大きな石垣が立ちどかる。侵入者は今も足がすくむ。



桜御門跡

高松空襲で焼失した「桜御門跡」。よく見ると、その焼け跡が残る。



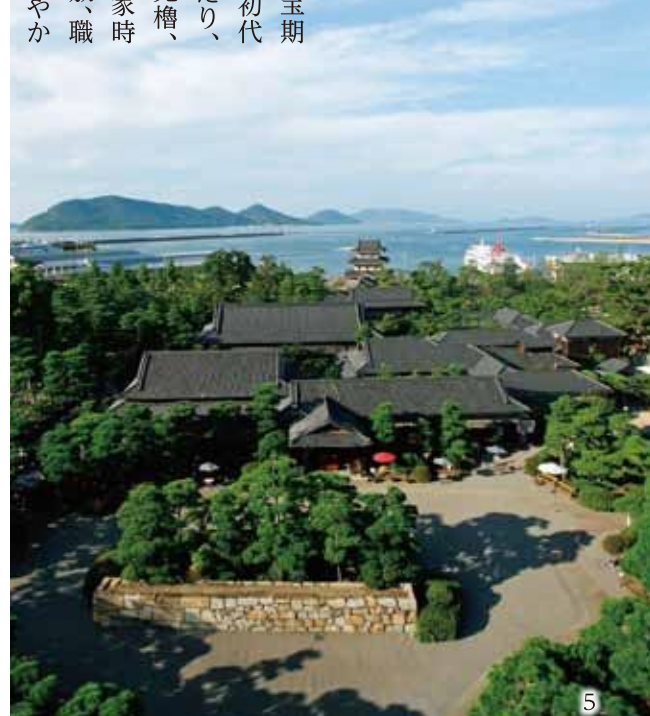
旭橋

明治時代に架けられた現在の「旭橋」も筋交橋。ちなみに橋に刻まれた「旭橋」の文字は松平家12代当主頼壽（よりなが）伯爵が、向かって左側のひらがなの文字は昭子夫人が書かれたもの。



桜ノ馬場

大正時代からは人力車の競争や次いで自転車競技が行われたという「桜ノ馬場」。今では桜の名所として知られている。



古地図でたどる ご城下の今昔

高松ご城下町歩き

享保年間（一七一六年〜一七三六年）に描かれた高松城下図は、三代藩主頼重時代の高松の姿が描かれている。この地図を頼りに、殿さま気分でご歩き。

まさに海に浮かぶような高松城。天守閣から北を望めば、瀬戸内海の絶景。心地よい潮風に目を細め、南に向けば広がるご城下の町並み。今でいうウォーターフロントである。

幾つかの門をくぐり抜け、中堀に架かる橋を渡れば、ずらりと並ぶ武家屋敷。袴を着けた侍たちとすれ違う。漆喰塀に沿って進めば、見えてきた外堀に架かる常盤橋。ここを渡れば、いよいよにぎやかな町人まち。

色とりどりののれんが掛かる商家が見える。右に向かえば兵庫町、物売りらしき人が通り過ぎてゆく。左に向かえば片原町、堀端で染め物を干す風景も見られたはず。わくわく胸が躍るが、果たしてどちらに進もう。

右も歩いて、左ものぞき、後は、まっすぐ南に向かう。ここは城下一の商人街「丸亀町」。道の両側にはさまざまな店が並び、粋な町人たちが、

家老が住んだ「西の丸」

高松城の西、江戸の昔には家老や上級武士の屋敷があった。古くから港があった場所、その上には駅やバスターミナルが造られている。高松駅に降り立てば、ここが町歩きの出発点となる。

堀の内側「丸の内・内町」

地名からもわかるように外堀と中堀との間にあり、西と南には堂々たる武家屋敷がずらりと並び、東には御用商人の屋敷もあった。

現在は、玉藻公園の南に位置し、高松三越やその先には商店街が続く。ちなみに三越の前付近に、外堀の南大手に架かっていた常盤橋があった。



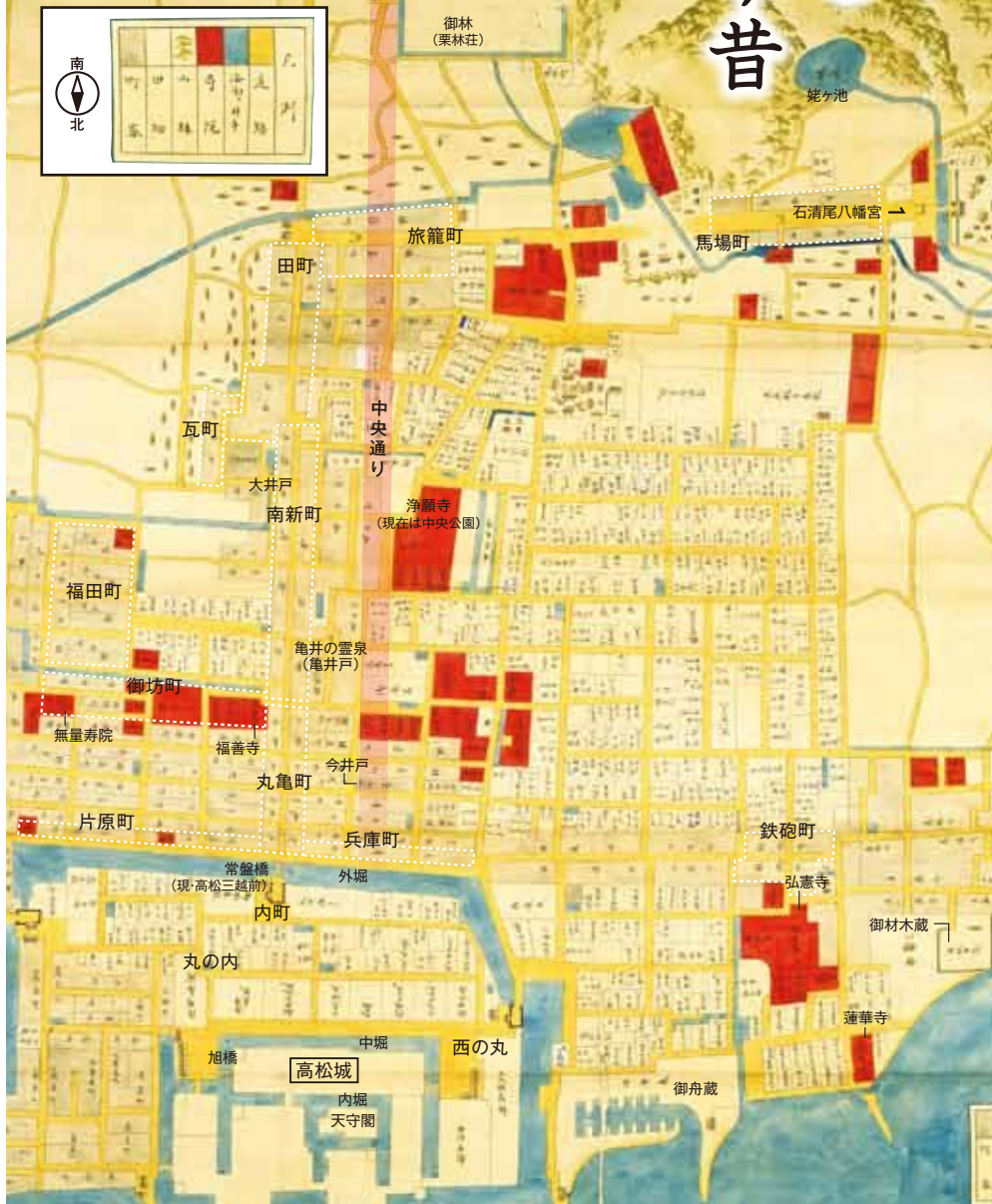
高松城下図屏風(部分) 香川県指定有形文化財
高松松平家歴史資料(香川県立ミュージアム所蔵)

町屋が並ぶ「片原町」

今も昔も商家が続く。ここには、現在も古天神として慕われる「華下天満神社」がある。松平氏入封当時は荒廃していたというが、元禄から正徳時代（一六八八年〜一七一六年）の学問振興に伴って、藩が大修築を行ったと伝わる。庶民的な商店街で、地元の雰囲気味わえる。

兵器庫があった？「兵庫町」

「兵庫」というのは兵器庫を意味するが、ここに兵器庫があったという確かな証拠はまだ見つからないとか。それなのに、なぜ「兵庫町」と呼ばれるのか？謎を秘めたこの町は、今では商店や飲食店が並びにぎわう。



享保年間高松城下図 高松市歴史資料館所蔵

あでやかな着物姿で通り過ぎる。

西の横道に入れば、桶職人や塗師、染め物職人、刀の研師が住む町もあるが、線香の香りに誘われて東の御坊町に入る。無量寿院に手を合わせたら、その南に見えてくる福田町。

さらに進めば、瓦を焼く煙が見える瓦町。西に向かえば、近頃にぎわい始めた南新町。その南は

ご城下一の「丸亀町」

今も昔も城下町第一の商店街。町名は生駒氏が丸亀から商人を移住させたことによる。

このメインストリートを中心に、東に大工町、今新町、御坊町、西側に古新町、磨屋町、紺屋町、鍛冶屋町などが延びる。今もアーケード街を中心に横道散策も楽しい。

お坊さんの「御坊町」

福善寺、無量寿院などが今も残る寺町。その近くには馬場があった時期があり、現在も古馬場町と呼ばれている。

瓦を焼いた「瓦町」

商店街の南の拠点でもある瓦町。瓦を焼いていたのでこの地名がある。今は、おいしいものを焼くにおいが漂ってくるようだ。

新しく延びた「南新町」

頼重の入封後に町人まちが南に延びた新しい町。

田んぼの中の「田町」

南新町の南、頼重の時代以降にできた町人まち。南東部には田んぼが広がっていた。城下町の南の入り口となる。

街道に続く「旅籠町」

頼重が社殿を改修したという石清尾八幡宮の前は、両側に馬場町とある。馬が駆け抜けていたのだろう。その南には姥ヶ池。確かにここに池があった。そして、栗林荘の北にあったのが旅籠町。宿屋が並ぶここを頼重は茶屋町と呼ばせ、遊里を置いたと伝わる。

周辺は田畑が広がっていた。栗林荘の飛来峰からは黄金に広がる麦畑を眺めることもできたという。

頼重公の上水道

寛永二十年（一六四三年）の日照りに困り果てた頼重は、翌年から城下の南にあった「亀井戸（亀井の霊泉）」などを水源に選り、土管や木樋、竹樋を使って配水工事を行った。なかでもわき水が出る穴が壺の形であった「亀井戸」の水源地は、南北約三十六メートル、東西約十八メートルという大規模なものであった。町の広がりと共に、瓦町の大井戸などからも水道が敷かれ、殿さまの上水道は長く高松の暮らしを支えてきた。

この上水道は、土中に管を埋めた先進的なもので、地下水を水源としたものでは我が国初という説もある。



瓦町に現存する大井戸水神社。現在は毎年6月に水神祭が行われ、境内につるさる絵行灯(あんどん)が風物詩となっている。

殿さまのおもてなし「栗林公園」

狩猟場から迎賓の庭へ

ご城下の南に松平家の別荘「栗林荘」(現在の栗林公園)があった。当初は「御林」と呼ばれていた広大な園は、歴代藩主が手塩にかけて創り上げた庭の芸術作品。松の美しさでも知られる回遊式大名庭園であり、現在では国の特別名勝に指定され、世界的評価も受けている。

江戸時代には大名庭園が各地で造られたというが、その多くは迎賓館のような役目を担っていた。大切な客人を数々の趣向でもてなし、ときには現代でいうイベント広場であり、パーティー会場のような役割を果たした。

初代藩主頼重は帰国の度に御林を訪れていたが、当初は主に武術や狩猟が目的であったという。しかし、隠居後は高松城から栗林の地に居場所を移したことから、大名庭園としての整備が本格化した。

現在の栗林公園の姿に近づいたのは、五代藩主頼恭時代の大改修。その完成後は、藩の学者である中村文輔に命じて各名所に中国風の名称を与え、「栗林荘記」を記した。これはいわば漢文による江戸時代のガイドブック。この「栗林荘記」を手がかりに、当時の庭を訪ねてみたい。

殿さまのテーマパーク

栗林荘はいわば江戸時代のテーマパークのようなものといえる。そのテーマとは、人々の心にある理想郷であり、あこがれの場所を表現するといふもので、古代中国から伝わる「神仙思想」の楽園や観音霊場を思わせるような場所が現在の栗林公園にも設けられている。

例えば、仙人にあこがれ自らも永遠の命を願うという「神仙思想」では、仙人たちが集まり遊ぶ楽園や不老不死の霊薬があるという神仙郷なるものが想定されているが、荘内にはそれをイメージした一画が造られた。

鶴・亀・猿・松など、めでたいといわれるものになんだ場所も多い。さらに、「富士山」といった実在の場所を模した風景も造られていた。



天女嶋

湖に浮かぶ天女嶋は、その名の通り幸福な心持ちになる島。南湖に浮ぶ楓嶋(ふうしよ)・天女嶋(てんにょとう)・杜鵑嶋(とけんしよ)という3つの島は「神仙境」という不老不死の霊薬がある場所を表現している。

「実に湖中の福地たり」

「楼の東面半ば垂れて湖にあり」

江戸時代には北斗七星に似せた七つの建物「星斗館」があり、そのうちのひとつ「掬月(くくげつ)楼」と呼ばれた建物は、東側が湖面に突き出ていた。現在は残された五つの建物を総称して「掬月亭」と呼ぶ。掬月とは中国唐時代の詩「水掬すれば月手に在り」の一節からつけられた。



「木益老い石益痩せ苔色深し」



老木や苔むした石が風情に富む、園内の中でも特に歴史が古いとされる「小普陀(しょうふた)」。歴史的にはこの場所こそが栗林公園の出発点で、16世紀後半、土地の豪族が庭を造ったのが始まりといわれている。中国浙江省にある観音霊場「普陀山」に由来し、藩政時代には近くに観音堂があった。

園内を巡り、その風景の影にある意味や思いを探るのも面白い。

高松藩の農業試験場

江戸時代は園芸が盛んで、珍しい季節の植物や品種改良されたものは高値で取引されたという。そこで、頼恭の時代には、農業試験場の役目も担った「梅木原薬園」が造られた。薬園としては、朝鮮人参の栽培を試みたが量産には至らなかった。その他、中には茶園や桜園、橘園、百花園があったという。薬草園の頭取として、宝暦九年(一七五九年)から二年間、平賀源内が勤めている。源内は主に各地から珍しい植物を集めるのが仕事であった。

おもてなしの仕掛け

江戸時代のテーマパークにも人々を喜ばせる仕掛けがあった。栗林荘では、それが「桶樋滝」や「吹上」である。

そして、最大のアトラクションは湖を巡る和船。春の新緑、夏の蓮池、秋の紅葉と、船上から眺める景色は人々を感嘆させただろう。弘化元年(一八四四年)に描かれたとされる栗林古図の船蔵には、「御百千秋丸」の名前が見える。現在人氣となっている和船の名前は、ここからきている。ちなみに、「栗林」の名前の由来は諸説有り、栗の木が群生していたからとよく言われるが、中国古典「莊氏」にある「遊於栗林」にちなんで付けられたという説もある。



飛来峰からの眺望

山頂付近の岩は高く大きく、獅子が座しているごとく。「飛来峰(ひらいほう)」は園内で最も高く、頂上からは、紫雲山の深い緑を背景にして、園内一の眺望が楽しめる。

栗林公園

高松市栗林町1-20-16 ☎087-833-7411 (栗林公園観光事務所)
[入園料] 大人410円、小人170円
[開園時間] ほぼ日の出～日没(月によって異なる)

「吹上(ふきあげ)」には、小石の間から吹き上がるようなわき水があり、これが園内の水源地である(写真奥)。当時は水の勢いが強く、その手前にある飛び石は着物の裾をあげて渡っていたとか。それも遊び心をくすぐる仕掛け?



吹上

「水小石の間を散渙寒裳して渉るべし」



岩と樹木が闊うごとの豪快な石組み。「会俣(かいせんがん)」は、仙人が集う場所。対岸にある「桶樋滝(おけどいのみき)」は、藩政時代、家臣が桶(おけ)に水を入れて運び、樋(とい)から水を流して殿さまや客人をもてなしたという。

「石怒り木觸し」



栗林図 高松松平家歴史資料(香川県立ミュージアム所蔵)

殿さまがつくった極楽浄土 「法然寺」

おなり

御成街道

高松城下の南に延びる仏生山街道は、歴代藩主が度々参詣に通った道。「御成街道」と呼ばれ、その先には松平家の菩提寺がある。

初代藩主頼重は浄土宗に帰依し、那珂郡小松庄（現在のまんのう町）にあった法然上人ゆかりの生福寺を移転、再興し「仏生山来迎院法然寺」と名付ける。

寛文十年（一六七〇年）の完成当時は三十三の門と二十四の堂塔が立ち並ぶ壮観さ。初代藩主の願いが込められたというこの名刹を、まずは総門から藩主の墓所「般若台」までたどってみたい。



本堂には法然上人一刀三礼作と伝わる本尊阿彌陀如来立像と「波乗り上人像」（写真左）が安置されている。

西方浄土に歩む

頼重公がこの世に描こうとした「極楽浄土」、そこそが仏生山法然寺である。総門をくぐると「二河白道」と呼ばれる道があらわれる。創建当時は二つの池（前池と蓮池）に挟まれ、一本の道が「黒門」に続いていた。

二河白道とは、浄土教における極楽往生を願う信心を譬えたもの。右の河（蓮池）は欲に流れる貪りや執着の心を表し、左の河（前池）は燃え上がる怒りや憎しみを表す。お釈迦さまの勧めと阿彌陀さまの導きにより欲におぼれず進めば、先には極楽浄土が待っている。

蓮池は現在埋め立てられているが、総門脇には今も「十王堂」が建っている。ここで閻魔大王の裁きを受け、白道を進めば、先に待ちは黒門である。

石段の上の極楽世界

さらに広庭を進めば、建立当初の延宝二年（一六七四年）、京の仏師によって造られた金剛力士が力強く迎えてくれる。この仁王門から真西に向かつて石段は続く。まさに西方浄土に向かつて一

歩一歩と進む。登り通せば「来迎堂」の極楽世界。来迎堂は五間四面の伽藍。堂内正面の須弥壇に奈良の唐招提寺より移されたと伝えられる阿彌陀如来。その背後には金色の壁一面に二十五の菩薩が樂器を奏で歌い舞う。ここぞ西方極楽浄土。夕日が沈む頃は、境内から来迎堂が燦然と輝いて見えるという。

その上に、歴代藩主の魂が眠る「般若台」がある。

分け隔てなく

頼重の信仰心は厚く、領内の寺社の再建、宝物の寄進などは約八十社に及ぶ。とくに法然寺の建立には力を注ぎ、「仏生山法然寺条目」を定めた。そこには、「般若台の外は道俗貴賤を選ばず、墓処所望次第之を建てさせる可し」。身分にかかわらず希望する者は山中に墓を造ることを許したのである。宗派を超えた修行の場としたことも併せ、仏生山を藩民全ての信仰の山としたいという頼重の熱い思いが伝わる。

延宝元年（一六七三年）に頼重は隠居、龍雲軒源英と号した。龍を愛した頼重にちなみ境内には龍の飾りや名前が残されている。

延宝三年（一六七五年）、頼重は五十四歳で剃髪し、元禄八年（一六九五）に七十四歳の生涯を終えた。来迎堂で葬儀が営まれ、般若台の中央に葬られる。

高松松平家の御位牌を安置する「御霊屋」に納められた松平頼重像。（非公開）

極楽世界を表した「来迎堂」。暗い堂内に目を凝らせば神々しい阿彌陀如来とさまざまな樂器を持った菩薩たちが浮かび上がる。



かつて大名行列が行き交った御成街道。門前の全長1.3キロは歴史街道として知られ、虫籠（むしこ）窓など江戸の風情を残す家並みがある。毎年10月中旬には「高松秋のまつり」として仏生山大名行列が行われる。



「来迎堂」の天女。



江戸時代の文書「仏生山霊宝略記」には、頼重に夢のお告げがあり、その導きにより山頂から舍利（釈迦の遺骨）を発見したとある。頼重はその舍利を厨子に納めて法然寺に寄進した。頼重の計画では、境内に五重塔を建立し、そこに仏舎利を安置するはずであった。当時の絵地図に建立予定地が記されていた。それから三百年、頼重の悲願は平成の五重塔にかなえられた。

今、殿さまの夢が目の前にそびえる。

頼重悲願の五重塔



（右）「お成りの間」と呼ばれ、藩主が参詣される折の休憩所であった「栖霞亭（せいかてい）」。

（左）高松松平家の墓所である「般若台」には、頼重をはじめ、歴代藩主やその家族の墓石が200基以上並ぶ。（非公開）

江戸の昔から「嵯峨の立ち釈迦。讃岐の寝釈迦」といわれ、全国にその名が知られた立体涅槃（ねはん）世界。釈迦の入滅を嘆き悲しむ様子が、寝釈迦を囲む木造彫刻により、ほぼ実物大のスケールで再現されている。（三仏堂・有料）



ご城下から東へ西へ

高松城下を飛び出して、讃岐の東へ、西へ、松平家ゆかりの土地を訪ねてみよう。

屋島神社（高松市屋島中町）

通称「讃岐東照宮」。祭神は徳川家康。相殿に松平頼重をまつる。家康の孫にあたる頼重が高松藩主となった際に徳川家康を宮脇村の本門寿院にまつたのが始まり。後に八代頼儀が屋島山麓に社殿を造営する。左甚五郎の六世、五代目の左利平忠能が、松平家の客分棟梁として、文化十二年（一八一五年）に完成させた神門の彫刻が見事。明治時代になって冠嶽神社と改め、明治七年（一八七四年）



屋島神社



神門の彫刻



色鮮やかなツツジは4月下旬頃が見ごろ

に屋島神社となった。香川県では徳川家康をまつる貴重な神社であり、社殿のあちこちに葵の御紋が施されている。家康ゆかりの囲碁守りが人気。

江戸時代は高松藩の所有であり、藩主や藩士が氏子でした。明治時代になると松平家の尽力もあり、「県社」となりました。見どころは火災をまぬがれた神門。葵の御紋が付いた門には、獅子や鳳凰、龍などの華麗な彫刻が施されています。正月と例祭の四月十七日には、この門が開きます。四月の下旬には、境内のツツジが美しいことでも有名です。また、玉藻公園に建立されていた玉藻廟の鳥居や手水鉢が、天守台石垣の修理解体にあたり、ここ屋島神社に移されています。



屋島神社 宮司 磯部 和磨さん

屋島神社 高松市屋島中町140 ☎087-841-9475



囲碁守り

日内山霊芝寺（さぬき市末）

頼重が山城国から恵忍律師を招き、寺院の復興を命じ堂宇を建立した。恵忍は後水尾天皇とも和歌の上で親交があった高僧であり、頼重は頼常を連れて度々訪ねていたという。二代藩主頼常は、子どもの頃から慣れ親しんだこの寺を霊芝寺と改め本堂を建立する。梵鐘も頼常の寄進。ここは「オハカシヨ」と呼ばれ、頼常と九代藩主頼恕の墓所でもある。二人は共に水戸藩の出身。遺言により水戸家の家風によって儒教方式で埋葬された。

頼恕が「遼月楼」と名付けたお成りの間と称

する別棟もあり、頼常の仏事でここを訪れた際、月明かりの美しさを楽しんだという。今も、墓参に訪れた松平さまは、このお成りの間でのときを過ごされる。



霊芝寺山門



頼恕公直筆の額

日内山霊芝寺 さぬき市末695 ☎087-894-2425

霊芝寺 住職 長楽 峯苑さん



松平さまが来られる日は、戦前まで大変な騒ぎであったと聞いております。寺の馬場先の両側に、志度と長尾のそれぞれの小学生が並び手を振ってお迎えしました。また、お餅をついて、「お成り餅」としていつもお出ししていたという話です。そのお餅を載せる三玉や湯飲みにも葵の御紋が入っております。



お成りの間

大の場（高松市浜ノ町）

高松城下の西にある大の場。文化年間（一八〇四年～一八一八年）の城下図には、堀川港の西に御船蔵と蓮華寺があり、その間に大の場の地名がある。寛永二十年（一六四三年）、頼重は家臣今泉八太夫に命じて藩士に水泳を教えさせ、その後は水泳訓練を盛んに行った。これが「水任流泳法」（高松市指定無形文化財）の始まりである。嘉永二年（一八四九年）の城下図には射術大的稽古場が記され、その東に水泳場があった。



大的場

泳ぎを武道の一つと認めてくれたのは初代藩主頼重さんであり、この人こそが水任流の生みの親です。その頼重さんに水泳を教えたのは父の徳川頼房。その父である家康公からの流れをくむ泳法です。全国に十三の古式泳法が伝わりますが、高松の水任流にしかない独特の泳ぎ方も残されています。



水任流保存会 第15代師範 福家 恵美子さん

現在は、一月三日に大的場海水浴場で、六月の第一日曜日には玉藻公園のお堀で水任流をご披露しています。お堀は波の来ない海水で非常に泳ぎやすいので、全国の方が楽しみに来てくださいます。ぜひ、一度ご覧くださいませ。



白鳥神社

（東かがわ市松原六九 ☎0879-253922）

日本武尊が白い鳥となり、この地に舞い降りて、まつられたのが始まりといわれる白鳥神社は、頼重が寛文四年（一六六四年）京都から猪熊千倉を招き神主とし、本社、拝殿、神楽殿、神馬殿と周囲の回廊、御旅所などを新築させて再興した。領地における東の砦としての役目も期待していたと考えられている。また、頼重は再興の翌年正月に、頼常を連れて鑑の着初式を行っている。

平賀源内旧邸

（さぬき市志度四六一 ☎087-894-5513）

江戸時代の奇才として知られる平賀源内は、寛延二年（一七四九年）に家督を継ぎ高松藩の志度御蔵番となり、やがて栗林荘にあった薬草園の頭取となる。五代藩主頼常は無類の博物学好き、源内は藩主の命で動植物の収集などを行い、その業績は十三帖に及び図鑑に反映されたという。

屋島（高松市）

全讃史によると、入封間もなくの正保四年（一六四七年）に頼重は、屋島山下の逢引の堤を壊して川とし、いにしへの姿に復興させたという。また、屋島寺の寄進にも力を入れ、千体仏堂や本尊十一面観音像を造立している。

香西（高松市）

本津川の河口、瀬戸内海に面する「香西浦」は、昔からの良港で漁業や海運業で栄えていた。ここで作られた鰯の力アスミは將軍家への献上品にもなっており、住人は参勤交代の御座船の水主として勤めている。また、この地にある香西寺は、寛文九年（一六六九年）に、頼重によって現在地に再建された。

殿さまが愛した技

日本一多彩な技「香川漆器」

「香川漆器」は技法も多様で、製品の種類も日本一。いかに大事に育てられてきたかが分かる。松平家の歴代藩主は、文化や産業の振興にも力を入れ、さまざまな工芸も盛んになった。そうした風土を背景に、やがて、ご城下では漆器づくりが栄え、あまたの名匠が誕生した。

その代表が、香川漆器の創始者、玉椿象谷。象谷は、文化三年（一八〇六年）、高松城下の外磨屋町今井戸の傍らで、鞘塗師の長男として生まれた。家業を継いで塗りと彫りの技術を身につけた後、中国や東南アジア伝来の蒔絵、存清、彫漆という技法を習得。それをさらに発展させ、独特の漆芸技法を生み出した。

象谷の才能を認め藩に抱えたのが九代藩主頼恕。すでに二十五歳のときには、頼恕から菓子盆などの制作を命じられている。象谷はそれから三代の藩主に仕え、今日の香川漆器の基礎を築いた。

また、嘉永三年（一八五〇年）、城下の内町で生まれた高松藩士・後藤太平は、使い込めば使い込むほど独特の風合いが増すという後藤塗の創始者となる。



さいしききんまおんりょうしずりばこ

玉椿象谷「彩色蒔絵御料紙硯箱のうち 硯箱」
高松平家歴史資料（香川県立ミュージアム所蔵）

嘉永7年（1854年）に象谷が制作した籃胎蒔絵の代表作。この硯箱と料紙（書くのに用いる紙）を納める料紙箱とともに一揃いで作られた作品。10代藩主頼胤の命により作成された。



ついでくまつがうらこうごう

玉椿象谷「堆黒松ヶ浦香合」
高松平家歴史資料（香川県立ミュージアム所蔵）

嘉永4年（1851年）、頼胤の命で象谷が制作した代表作。將軍家や御三家（紀伊、尾張、水戸）、御三卿（田安、一橋、清水）にも献上されたという。

一子相伝の技「保多織」

栗林荘で隠居生活を送る頼重は、元禄二年（一六八九年）、京都から北川伊兵衛を呼び寄せ、中野村（現在の高松市中野町）に織屋を建て、幕府献上品の開発を行った。

伊兵衛は朝廷の装飾方御用を務めていた技の持ち主で、やがて長年美しさが変わらない丈夫な絹織物「保多織」を生む。当時は保多絹と呼ばれ、売買が禁じられ、一子相伝の秘法として製法が保護された。明治に入り、絹糸を綿糸に変えて一般に普及させ、現在に至る。冬温かく、夏涼しい風合いは今も多くの人に愛されている。

岩部保多織本舗（高松市磨屋町）
☎087・82217743



保多絹は江戸時代、上級武士にしか着用が許されなかったが、明治維新以降は絹から綿に切り替え、敷布（シーツ）や布巾としても愛用されてきた。

永遠を刻む技「庵治石」

硬く、美しく、風化に強く、花崗岩のダイヤモンドと言われる庵治石。高松市の東、庵治半島の牟礼や庵治の地で採石・加工され庵治の港から運び出されたので、「庵治石」と呼ばれる。

藩政時代には、高松藩所有の「御用丁場（石切場）」が、現在の庵治・牟礼両町境付近の少し北寄りにあった。ここから切り出されたであろう庵治石を使い、白鳥神社や石清尾八幡宮の灯籠が頼重により建立され、法然寺の頼重の墓や靈芝寺の二代頼常の墓が造られたと推測される。また、文化十一年（一八一四年）、八代頼義の時代に行われた屋島神社造営の際にも、ここから多くの石が切り出されたという。

藩政時代が終わり、藩の御用丁場は、高松藩の大老職を務めていた大久保家の所有となり、この頃より「大丁場」と呼ばれるようになった。

高松市石の民俗資料館（高松市牟礼町）
庵治石に関わる歴史や技術、作業風景などを紹介している。
☎087・8458484



庵治石で作られたとされる石清尾八幡宮の灯籠。

磨き上げた技「和三盆」

五代頼恭は、讃岐の風土に適したサトウキビの栽培やそれによる砂糖づくりの研究を命じたという。その命を受けたのが、御殿医であった池田玄文であったが、残念ながら砂糖製造の実現には至らず、研究はその弟子である向山周慶に引き継がれた。そして、二十年の歳月をかけた寛政元年（一七八九年）、白砂糖の製造に成功する。高松藩では砂糖の流通をうまく把握、統制することで、財政を立て直した。これ以降、讃岐の砂糖は国内第一の生産高を誇り、その技術は秘伝として継承された。

現在は東讃でサトウキビの栽培が行われ、東かがわ市で和三盆の技が伝えられている。

三谷製糖（東かがわ市馬宿）
文化元年（一八〇四年）創業の
三谷製糖では、昔ながらの
和三盆づくりを今も伝えている。
☎0879・3332224

木型工房市原（高松市花園町）
和菓子を作る際の木型を作る工房。
その木型を使って和三盆の
型抜き体験教室も開かれている。
☎087・83313712

季節の花々や
おめでたい形の木型で
美しい和三盆の菓子が
生まれる。

殿さまの産業振興

産業を保護し、技の数々を愛した殿さまたちであったが、藩の財政難に苦しみ、財政改革を幾度か行っている。その一つが八代頼義時代の「享和新法」という政策である。これは、積極的な藩札の貸し付けでインフレを招いたとされているが、この新法のもう一つの柱は藩内で生み出される品々を奨励するというものであった。

東浜の北にある海岸を埋め立て、さまざまな品物を扱う万問屋を移住させ、藩外の商船との取引を活発に行おうとした。また高松藩も大型船を建造して、米・綿・雑穀・藍・砂糖などの藩の産品を、大坂などに販売することを計画していた。そのため生産資金の貸し付けも藩が行っていた。さらに、藩内の品を使用するよう領内に通達し、領外からの移入品を厳しく取り締まったという。

高松藩ゆかりの技

殿さまの感性を受け継ぐ「松盆栽」

栗林公園の松の美しさに心打たれる高松。ここ讃岐には松に関する伝統の技が伝わる。ご城下を西に進む街道沿いの鬼無や国分寺を産地とする「松盆栽」である。

藩政時代の文化年間（一八〇四〜一八一八年）、鬼無の高橋周輔が接ぎ木の技術を普及したと伝わる。藩政時代に生まれた技は、明治以降に大きく花開き香川県は日本一の松盆栽の産地となる。一帯の土壌が、上は砂質、底は粘土質で盆栽の仕上げに適していたからだという説がある。

また、松平家の十二代当主である頼壽は、小さな盆栽を「小品盆栽」と名付け、その世界を確立した人物として知られている。その技は、讃岐国風小品盆栽会に受け継がれた。

香川県鬼無植木盆栽センター（高松市鬼無町）

☎087788224091

※5の付く日に限り電話応対可能

国分寺盆栽センター（高松市国分寺町）

☎08778742795

公益社団法人 全日本小品盆栽協会

讃岐国風小品盆栽会（高松市国分寺町）

☎08778740335（平松春松園）



高松市鬼無町や国分寺町には盆栽畑が広がる。



栗林公園の手入れ松「鶴亀松」。



殿さまの感性を受け継ぐ「松盆栽」

時代を超えた愛再び

万延元年（一八六〇年）三月三日、江戸城桜田門外で大老井伊直弼が水戸藩士に暗殺される。この桜田門外の変は、遠く讃岐の藩主にまで黒い影を落とした。

十一代頼聰の妻は、井伊直弼の娘、千代姫であった。水戸家、井伊家、両家と親しい高松藩は、微妙な立場に立たされる。そこに十代頼胤が襲撃されるとの噂が聞こえてくる。そこで、家老の松崎波右衛門が千代姫との離縁を主張。大殿の命にかかわると、頼聰は泣く泣く千代姫を彦根に帰すこととなった。

やがて明治維新を迎え東京に移り住んだ頼聰は、有栖川宮熾仁親王の口添えで、弥千代（千代姫）と九年ぶりに復縁。二年後には十一代頼壽が誕生し、幸せな日々がよみがえる。

その後は五回にわたり夫人と共に香川を訪れ、讃岐の地を愛でたという。



晩年の千代姫 写真提供：玉藻公園管理事務所

高松張子★

藩政時代の町の名が残る「鍛冶屋町」では、昔から玩具や人形を取り扱う店が多くあった。そこで、作られていた人形の一つが「高松張子」。粘土や木の型に和紙を張り合わせて作る素朴な玩具。中でも有名なものが「奉公さん」。この人形には、奉公先のお姫さまの病を自分の身に移して亡くなったおまき」という娘の伝説が残されている。昔は、子どもが熱を出すと奉公さんを抱かせて、翌朝、瀬戸の海に流すと、子どもの熱が下がると言われていた。

今も子どもの無病息災を願って、この人形を飾る。ほかに、鯛持ちえびず、鯛抱き童子といった子どもたちの幸せを願う人形が多くある。最近では、干支の張子も人気がある。



乃村玩具（高松市八坂町）

☎087782218442

讃岐提灯

江戸時代にも盛んに行われていたという四国八十八ヶ所霊場巡り。その奉納提灯として生まれた「讃岐提灯」。特に江戸時代初期に生まれた「一本掛け提灯」は、殿さまの病氣平癒の祈願提灯として考案されたもので、一本の竹ひごを切らずに三重の提灯を作る。一番内側の提灯は提灯の中に手を入れて複雑な龍神や神仏を描く。これを囲む二番目の提灯には、伝統的な祈願文やお経、祝詞を書く。一番外側の提灯は、三つの提灯が一点で合うように製作され、伝統的な図柄や模様などが描かれている。日本で唯一の技と言われ、この古典技法から今では、うどんやサンタクロース、ギターといったさまざまな提灯が作られている。



三好商店（高松市藤塚町）

☎08778318008

組手障子★

日本建築に無くてはならない「障子」。

江戸時代末期には、障子の格子にさまざまな装飾を加えるようになった。切り込みを入れただけで複雑な文様を組み合わせて作り出す「組手障子」。コースターづくりなどの体験もできる。



丸生木工所（高松市寺井町）

☎08778867631

森本建具店（高松市三谷町）

☎08778648872

讃岐かがり手まり★

江戸時代には全国で親しまれていたという木綿手まり。讃岐でも古くから草木染めをした木綿の糸で愛らしい手まりが作られてきた。その伝統を今に伝える「讃岐かがり手まり」。モミガラを芯にして、江戸の昔から愛されてきた文様が浮かび上がる。体験も可能。



讃岐かがり手まり保存会（高松市兵庫町）

☎08778224277

欄間彫刻

江戸時代初期に藩祖頼重を慕って高松に移り住んだ飛騨の木工職人が、この地に欄間彫刻を伝えたという。

現在は、ドアや引き戸、壁掛けにも欄間彫刻の技が生かされる。小物の彫刻体験が可能。



小比賀彫芸（高松市松福町）

☎08778220516

讃岐のり染★

江戸時代の高松城下、紺屋町には染物屋が軒を連ね、着物や野良着が染められていた。その染色の技法が今に引き継がれ、のれんや旗、獅子舞のゆたなど染められている。讃岐のり染は、筒描きや型染めに大別され、もち米で作った糊を型紙などにより布地に置き、藍に漬けたり、刷毛で引き染めたりして染め上げる。糊をおいた部分には色が付かないので、模様が浮かび上がる。現在はインテリアとしても人気がある。



大川原染色本舗（高松市築地町）

☎087782215769

かがわ物産館「栗林庵」

栗林公園の東門横にあって、選りすぐりの讃岐の物産が並ぶかがわ物産館。松平家や高松藩ゆかりの品々も待っている。江戸のテイストを残しながら新しい感覚で楽しめる名品も多く、ゆっくりと土産物選びを楽しみたい。



栗林庵
栗林町1-20-16（栗林公園東門）
☎087-812-3155
【営業時間】9:00～
※閉店時間は栗林公園の閉園時間に合わせ、季節によって変動します。

★の印があるものは「栗林庵」でも取り扱っています。

殿さまが愛した 茶と菓子

頼重の茶道指南役

初代藩主頼重は、後水尾上皇から和歌の指南を受けるなど、高い教養を身につけた殿さまであった。頼重によって、京の文化が高松にもたらされ、その後の讃岐文化の礎となったと言える。その京文化の一つが茶の湯。千利休のひ孫にあたる一翁宗守を茶道指南として高松に招き、栗林荘で茶会を開催した。高松に来た当時の一翁宗守は七十四歳、茶人としては円熟期であった。二年半ほど茶道頭の役目を果たした後、京都に帰り、三千家の一つ武者小路千家を興す。別名は「官休庵」。その名には高松藩の茶道指南役という官を退いて、創設した意味が込められているとか。

それ以降も高松藩と官休庵の関係は深く、その絆の証が「木守」という楽焼茶碗。利休が楽長次郎に焼かせたという名器であったが、官休庵の三代目が松平家に譲り、その後の変遷を経て大正十二年（一九二三年）関東大震災で粉々に壊れてしまう。このときのかけらを入れて二代目の「木守」が復元され、官休庵の歴代当主が宗守を襲名する披露の茶会には、必ず



赤楽茶碗 銘木守
松平頼武氏所蔵(写真提供:香川県立ミュージアム)

使われている。今も、武者小路家からの使者が松平家に拝借に来るといいう。

こうして茶の湯が盛んになった讃岐では、味の良い茶菓子もたくさん生まれたのである。

高松藩のお庭焼

紀太家の元祖・森島半弥重芳は、豊臣秀頼に仕えた武士で千三百石を領したが、大坂落城後、信楽に住み焼物を家業とする。その子、森島作兵衛は、京都三條の栗田口に住み作陶を継いでいた。正保四年（一六四七年）、頼重に招かれ、十人扶持切米十五石ならびに御林（栗林公園）の北端に屋敷を賜り、姓名を紀太理兵衛重利と改め、紫峰と号した。これから「理兵衛焼」と称するようになり、重利の作品は古理兵衛と呼ばれる。

その後は、代々高松藩のお庭焼として御用を



古理兵衛 葵の御紋茶碗(手前)
古理兵衛 松竹梅牡丹絵皿(奥)
紀太家所蔵

勤め明治維新に至る。理兵衛焼には優美な作品が多く、抹茶茶碗や水指といった茶器などが数多く焼かれてきたほか、栗林公園の「古理兵衛九重塔」などの大型作品も残されている。明治三年（一八七〇年）、理兵衛の名を廃して理平と改めたので、それ以降は「理平焼」となり、県伝統工芸士の認定を受けた現在の十四代目まで、四百年におよびその技は受け継がれている。

理平焼 紀太理平(高松市中野町)
☎087-836-182630



栗林公園の古理兵衛九重塔

高松松平家 ゆかりの 銘菓

頼重は栗林荘に茶会に用いるための茶園造ったとされ、それが讃岐のお茶づくりにつながったという。
味わい深い香川のお茶で殿さまゆかりの銘菓を味わいたい。



左近
8代藩主頼儀の子である松平左近(頼該(よりかね))ゆかりの菓子。
富久(ふくろ)屋(高松市片原町)
☎087-821-3011



瓦せんべい☆
高松城常盤橋のたもとに店を構え、城の瓦にヒントを得て生まれたせんべい。
宗家くつわ堂総本舗(高松市兵庫町) ☎ 087-851-9280
田村久つ和堂本店(高松市片原町) ☎ 087-821-3231



三国一
明治の初めに松平家からアオイの屋号を使う許可をもらったという。葵(あおい)の御紋をかたどった菓子。
アオイ堂(高松市仏生山町)
☎ 087-889-0370



栗林のくり☆
以前は栗林が広がっていたという栗林荘の栗にちなんだ栗まんじゅう。
湊屋(高松市寿町) ☎ 087-821-8634



献上栗☆
高松藩が幕府に栗を献上していたことに由来する菓子。
陣屋菓子司(高松市松福町)
☎ 087-851-8368



さぬき松平公かすてら☆
高松城と葵の御紋をかたどった菓子。法然寺8代上人の咳を治したという「たんきり飴」も有名。
徳栄堂(高松市多肥上町) ☎ 087-889-5555



木守☆
松平家と官休庵の深いつながりを象徴する茶碗「木守(きまもり)」ゆかりの菓子。この菓子を作る「三友堂(さんゆうどう)」は高松藩士3名が明治以降に開業した菓子店である。ここには「披雲閣」や「高松様」という松平家ゆかりの菓子もある。
三友堂(高松市片原町) ☎ 087-851-2258

☆の印があるものは「栗林庵」でも取り扱っています。

殿さま自慢の讃岐の砂糖

五代頼恭の命により研究が始まった讃岐の砂糖づくりは、七代頼起の時代に完成する。八代頼儀の時代には、大量の砂糖が大坂に送られるようになり、雪白の如く、舶来品に似せさかおとらず、文化元年のころより菓子類に商人ども専ら用つと評判になっている。この頃には、すでに讃岐の砂糖が多く菓子に用いられていたことが分かる。

そうした讃岐産の砂糖人気に対して、高松藩では文政二年（一八一九年）から本格的な流通統制に乗り出し、さらに天保六年（一八三五年）には「砂糖為替金趣法」を実施している。これは、藩札で砂糖生産者に貸し付けを行い、大坂で砂糖を販売した代金によって幕府の通貨の形で返済させるというもので、それまで藩が抱えていた借金



屋島の民家博物館「四国村」に移築保存されている「砂糖メ(しめ)小屋」。牛を使いサトウキビの汁を搾った。





【監修】香川県立ミュージアム 【協力】(公財)松平公益会
【写真・図版協力】香川県立ミュージアム、高松市歴史資料館、玉藻公園管理事務所、(公財)松平公益会

主な参考文献 松浦正一『高松藩祖松平頼重伝』(松平公益会)
共著『香川県の歴史』(山川出版社)
木原博幸『近世の讃岐』(美巧社)
『香川県史 近世』3・4(香川県)
『ふるさと香川の歴史』(『香川県史 別編Ⅲ』)
中山城山原著・桑田明訳『口訳全讃史』(城山会)
井上正夫著『古地図で歩く香川の歴史』(同成社)
『讃岐人物風景』4・6・7(四国新聞社編)
『香川県の地名』(平凡社)
『高松まちある記』(高松松平藩歴史文化探訪推進協議会)
『栗林郷土誌』(高松市立栗林公民館 他)
『天下の銘石 庵治石』(寿協同石材株式会社)
『仏生山来迎院法然寺』(仏生山法然寺) など



アクセスガイド

- 玉藻公園** 無料駐車場有り
- JR高松駅から徒歩で約3分
 - ことでん高松築港駅すぐ
- 栗林公園** 有料駐車場有り
- JR高松駅から高徳線でJR栗林公園北口駅下車、徒歩約3分、またはJR栗林駅下車、徒歩約20分
 - ことでん高松築港駅から琴平線でことでん栗林公園駅下車、徒歩約10分
 - JR高松駅からことでんバス(塩江線、仏生山・岩崎線、由佐・空港線、池西・香南楽湯線)で「栗林公園前」下車すぐ
 - JR高松駅から車で約7分
- 法然寺** 無料駐車場有り
- ことでん高松築港駅から琴平線でことでん仏生山駅下車、徒歩約20分
 - JR高松駅からことでんバス(塩江線、仏生山・岩崎線)で「仏生山」下車、徒歩約25分
 - JR高松駅から車で約20分
- 石清尾八幡宮** 無料駐車場有り
- JR高松駅から高徳線でJR栗林公園北口駅下車、徒歩約10分
 - ことでんバス高松駅から宮脇町(弓弦羽線(宮脇町経由)・香西線)下車、徒歩約5分
 - JR高松駅からことでんバス(市民病院ループバス)で「八幡前」下車、徒歩約1分
 - JR高松駅から車で約7分

ことでん レンタサイクル

- 電動アシスト自転車であらくサイクリング。
- ▶貸出場所 ことでん仏生山駅、ことでん八栗駅
 - ▶貸出時間 8:30～19:00(年中無休)
 - ▶貸出料金 3時間500円(延長1時間につき100円)
※別途、貸出保証金として3,000円(返却時にご返金いたします)
 - ▶問合せ先 ☎087-831-6008
(ことでん運転営業所)
☎087-863-7300
(ことでん運輸サービス部)

詳細はことでんのHPをCHECK
<http://www.kotoden.co.jp/>

高松市レンタサイクル

- 市内7か所のレンタサイクルポートでの貸出・返却ができます。
- ▶貸出場所 p.22高松市街地図上のマークの場所7か所(有人ポートと無人ポートがあります)
 - ▶受付時間 7:00～22:00(年中無休)
 - ▶貸出料金 6時間まで100円、6～24時間200円
 - ▶問合せ先 ☎087-831-5383(レンタサイクル管理センター)
一時利用証申請場所にて受付が必要です。
詳しくはお問い合わせください。

詳細は高松市のHPをCHECK
<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/18197.html>

JR屋島駅レンタサイクル

- 「元気YASHIMAを創ろう会」主催のレンタサイクルです。
- ▶貸出場所 JR屋島駅構内 観光案内スペース
 - ▶貸出時間 土・日・祝日の10:00～15:00
 - ▶貸出料金 1日100円
 - ▶問合せ先 ☎087-841-9533(さや旅館)
☎090-2898-8712
(元気YASHIMAを創ろう会)